

劇場公開作品

「アイノカタチ」

監督・脚本 堂野晶敬

企画書

製作：アイノカタチ製作委員会

2021.3

企画概要①

本企画「アイノカタチ」は、音楽プロデューサーの堂野晶敬が長年かけて企画を練り上げた長編映画です。

主人公の真由美は、平凡なOLだが、医者 of 彼氏（智）と幸せな同棲生活を送っていた。後は、智からのプロポーズを待つだけの日々…。そんなある日、真由美は智から実家へ一緒に行かないかと誘われる。智の両親への結婚の報告だと喜んで実家へ向かう真由美だったが、実家で待ち受けていたのは、智の現在の義母であり元恋人である、浩子とその浩子と智の息子、剛だった。浩子とは「家族」であり、それは一つの「愛」の形でもあるが、「恋人」ではなく、結婚したいのは真由美だと言う智。真由美はその智の思いを理解出来ず、別れを選択する。以前から真由美に思いを寄せていた純平に、一時身を寄せてしまう真由美。しかし、やはり智に思いが残っている真由美は、浩子と再会し、話を聞くことで、智の思いを受け入れようとするのだった。2人は自分たちなりの「アイノカタチ」を築き始めるが…。

本作品は、人の数だけ存在するであろう「アイノカタチ」に注視し、「ルール違反」や「タブー」とされる中にも、確実に存在するであろう愛を描いた作品です。重厚なテーマを取り扱いながらも、登場人物達のどこかライトなキャラクター性により、笑いも溢れる、ただ重いだけではない、エンターテインメント性を持った作品を目指します。

企画概要②

撮影期間：2021年初春頃を予定

ロケ地：都内近郊を予定

完成：2021年中を予定

公開：2022年春公開予定

配給・展開に関して

配給に関して

配給会社：ラビットハウス、株式会社アイ・シー・エージェンシー、アルゴピクチャーズ

配給規模：全国シネコン数館、イオンシネマ、30館程度の単館公開予定

展開に関して

アマゾンプライム、U-NEXT展開を予定しております。

監督プロフィール



堂野 晶敬

1982年生まれ。名古屋市出身。

吉本興業NSC名古屋支部にて高校時代はお笑い芸人として活動。

高校卒業後は、ハワイで語学学校に通いながら、スキューバダイビングのインストラクターをしていた。

その後、LAに渡りLos Angeles City College映画製作学部を卒業する。
異色の経歴を持つ作詞作曲家、シンガー、映画監督、脚本家をこなす
マルチクリエイター。

音楽レーベルTOKYO RABBIT RECORDSを運営し、すみれ、リア・ディゾン、祐真キキらをプロデュース。音楽制作から、タイアップの取得まで一人ですべてをこなす。

歌謡性の高い切ないメロディーと、映画のシナリオの如く映像の浮かぶ歌詞で、
楽曲制作においては特にバラードを得意とする。

映画に関しては、短編映画を3本製作、本作「アイノカタチ」が初の長編映画製作となる。

フィルモグラフィ

短編映画「日傘の陰」 <https://youtu.be/jCnLD568sOU>

短編映画「東京」 <https://youtu.be/KtKd9TmSTUM>

短編映画「shiwase」 <https://youtu.be/jTUPfenivEs>

短編ドラマ「2LDK」 アマゾン、U-NEXTで公開中

短編ドラマ「5min in the Dark」 アマゾン、U-NEXTで公開中

監督ステイメント

普段は、音楽制作を中心にTOKYO RABBIT RECORDSというレコード会社を運営しております、この度、脚本監督を務めさせていただきます堂野晶敬と申します。映画という、時間もお金も人も必要な芸術作品を、弊社が作り出す音楽と絡めながら独自にアプトプットをしたい！そんな気持ちから「アイノカタチ」という物語を考えました。普段から、音楽を作る中で『愛って何？』とクサイことかもしれませんが考え続けながら、生きて参りましたが結論にはまだ至りません。ただ、生きてきた様々な場面から、感じた愛の形を物語として映像で描きながら、弊レーベルの音楽制作力と宣伝力を融合させ、表現をアウトプットしてゆくことができると感じております。“音楽と映像美”をテーマに、また通常の映画に比べて挿入歌を多く入れ、その楽曲の宣伝をテレビ、ラジオ、Webメディア等、レコード会社枠のインフラ上に乗せ、格安で映画「アイノカタチ」の宣伝をして話題にできれぱと考えております。

物語「アイノカタチ」は真由美を中心に様々な人間模様を描きます。

智が葛藤し、無茶起こしてて、ただ見方を変えると人間的に一番素直でピュア。この人のピュアがことの発端です。

順平は、幼少期から親がいなかったりと、どこかでお母さんを探しているのか寂しさを拭えない男。そして、サイコパスです。

浩子と智は許しあっている、そこには一つの愛の形があります。順平と浩子の彼氏慎吾、両親、色々な人間関係があり、その中で真由美は葛藤をして自分の気持ちと向き合い、人を受け入れて自分たちなりのアイノカタチを作って行く。

最後形ができたかと思ったら、あっけなく壊れてしまうのですが、、、ここには人としての根本の大切さ”幸せって掴むものだよ”を極端な表現ですが、順平の行動で見せました。これが真髓で、それを実は全員が求めています。浩子だって子供が欲しいってエゴだったり、慎吾も親父として認められたいってエゴで智を殴ります。もちろん智もですし、世間をどこかで気にしていたりする真由美だってそうです。ただ、一人では生きられないですから、その渦中にカタチを作って行くことが人生だなんて思ったりして、この本ができました。

あと、世の中に結婚制度がありますが、これって果たして正しいのか、、心っていつまでもニュートラルであるというか、素直にありのままいるからずっと成長し続けることができる気もしていて、それが大人になるたびに許されなくなっていく。大人になると人は変わらなくなると言いますが、変わり辛い環境になって行く気もしていて、ディープな部分なのですが、サブテーマとしてコミカルな要素も入れつつ問題定義をおこしたいとも考えております。